

異なる感情を引き起こす人の声を含む音声に及ぼす影響の解析

榎 小春

人は独りで食事するよりも、誰かと一緒に食事をするときの方がより多く食べると示唆されており(de Castro, et al., 1986; Tani et al., 2015)、テレビ音声(Stroebele & de Castro, 2004)や人の声のみ(Kawai et al., 2021)の呈示でも摂取量は増加する。また、BGM や感情の操作も、摂食量や味覚知覚に影響する。しかし、音環境や聴覚刺激の効果を調べた先行研究では、映像や音楽を用いた実験が多く、「人の声」のみの効果やその「話題内容」の影響に着目した研究は少ない。そこで本研究では、ポジティブおよびネガティブな感情を引き起こすと考えられる人の音声という音刺激が摂食量や味覚評価に及ぼす影響を調べることを目的とした。

実験は、大学生を参加者とし、異なる感情を引き起こす人の音声を背景音刺激(バックグランドミュージック、BGM)として流し、その音環境下で食物刺激(ブリッツ ロースト塩バター)を呈示してその摂食量を計測し、味覚評定を報告してもらった。参加者には実験開始時には実験の真の目的は伝えず「音のテンポが認知課題遂行に及ぼす影響を調査する目的の実験」と教示した。参加者は、まずメトロノーム音の呈示下で百ます計算(ダミー課題)に取り組んだ。次に実験者は参加者に「休憩」と称して食物刺激を提供し、自由に摂取するよう教示した。摂取量計測は参加者には見えないように実施した。食物呈示中は以下の3条件のいずれかの音刺激をBGMとして流した。休憩(摂食)時間の終了後、音声の印象や誘発された感情、食物刺激の味覚知覚への質問紙調査を行った。最後に実験の真の目的に気付いたかどうかを口頭で質問し、真の目的を開示し、データ利用の同意を求めた。各条件の音声刺激は、ノーマル条件では天気予報、ポジティブ条件では漫才、ネガティブ条件では怪談を用い、全て話者は男性であった。

【音声刺激への印象と感情応答】質問紙の回答から、音刺激条件間では音刺激への異なる印象や摂食時の異なる感情を誘導できた傾向はあったが、条件間での有意な差異はみられなかった。また、音刺激をより親しいと感じるほど、より心地よく感じていたことから、音刺激の話者に対する親近感、もしくは話者の人数や観客の有無、抑揚の有無などによって生じた「にぎやかさ」などの音刺激への印象が孤独感を低減させたと示唆された。【摂食行動】摂食量は、ネガティブ条件では他の2条件よりも少ない傾向ではあったが条件間に有意差はみられなかった。また摂食量と摂食時の感情との相関性の分析から、より穏やかな感情状態であるほど摂食量が有意に多かった。以上の結果から、ネガティブ条件では、怪談内容が身体の緊張状態を促進させたことで食欲が低減したと示唆される。【味覚評定】味覚評定では、「どのぐらい濃いか」の項目において、ポジティブ条件の参加者はネガティブ条件よりも有意に「薄い」と評価した。その他の条件と比べてポジティブ条件の参加者は音刺激に注意を選択的に向けたため、食物刺激への味覚への知覚処理が低下したと考えられる。しかしながら、食物刺激の濃度と音刺激への印象「刺激的—落ち着く」との間には有意な相関はみられなかったことから、注意選択以外の背景要因も考えられる。また、より怖いと感じるほど食物刺激への満足度は減少し、より楽しく、心地よいと感じるほど食物刺激を良質と評価していたことから、食物刺激の質や満足度の評価には気分一致効果が関与した可能性が示唆される。

以上から、人の音声やその内容、そして、それによって喚起される感情状態は摂食量や味覚評価に異なる影響を及ぼすこと、そして摂食量や味覚評価の項目毎での影響には異なる背景機序があることが示唆された。摂食量には身体の緊張状態が、食物刺激の味の濃さには注意選択による味覚知覚処理の低下が、食物刺激の質や満足度においては気分一致効果が作用したと示唆される。(行動生理学)